

An anime-style illustration of a woman with dark, wavy hair styled in a traditional Japanese fashion, adorned with a decorative hairpin featuring red and white floral ornaments. She is wearing a light pink kimono with a green sash and a blue undergarment. She is seated at a wooden desk, holding a calligraphy brush over a piece of paper with some ink strokes. The background is a warm, golden-brown wall with a subtle pattern, and a traditional Japanese lantern is visible on the right side, casting a soft glow.

年上の書道の先生

～稽古のあと、墨香る個室で～

年上の書道の先生 ～稽古のあと、
墨香る個室で～【体験版】

蜜夜文庫

く 稽古のあと、墨香る個室でく

蜜夜文庫【体験版】

...

第二話 大人のための書道教室

!!scene(scene01.png)

指先が、墨の色に染まればいいのに、と思ったことはなかった。

残業帰りの午後八時、遠野湊が最寄り駅の改札を抜けると、十一月の夜気が、コートの襟のあいだから忍び込んできた。街路樹の銀杏はもうほとんど葉を散らして、歩道のあちこちに黄色い葉が吹きだまつている。踏むたびに、乾いた音がした。息を吐くと白く濁って、街灯の光の中に、ゆっくり溶けて消えていく。この秋は、まともに夕暮れを見た記憶がない。会社を出る頃には、いつも、街はもう夜になっていた。

二十四歳、社会人二年目。都心のオフィスで、一日じゅうモニターと向き合っている。今の部署に配属されて半年、覚えることばかりで、毎日が背伸びの連続だった。上司の求める資料の水準に手が届かず、作り直しては夜が更ける。慣れない一人暮らしのアパートに帰り着く頃には、何かをする気力など、もう残っていない。

——こんなふうに、いつまで続くんだろう。

そう思いながら歩く手元には、今日突き返された企画書があった。中身のことではない。会議で回覧するのに、手書きのメモが「読めない」と言われたのだ。字が汚い。子供の頃からずっとそうだった。急いで書く、自分でもあとから読めない。丁寧な書こうとすると、こわばって、もつとみつともなくなる。たかが字だ、と笑い飛ばせない程度には、それは湊のなかで、古い引け目になっていた。

その夜、湊はいつもの帰り道を、いつもと少しだけ違う路地に折れた。工事を通いなれた道が塞がれていて、迂回するしかなかったのだ。住宅街の細い道を、街灯を頼りに歩く。どの家の窓にも、暖かい色の灯りがともっている。その灯りの列が途切れたところに、古い日本家屋が一軒、ぽつんと建っていた。

板塀の脇に、小さな木の看板が掛かっている。

「墨月書道教室　——大人のための、お稽古——」

湊は、足を止めた。

大人のための、という一文が、なぜか目に残った。それより先に、鼻が動いていた。格子戸の隙間から、かすかに、墨の匂いが流れてくる。子供の頃、学校の書き初めて嗅いだ、あの匂い。硯の海に水を落として、墨を静かに磨っていく、あの時間。教室じゅうがざわついているのに、その匂いのなかにいるあいだだけは、なぜか、少しだけ息がしやすかった。

なぜ、いま思い出したのだろう。

格子戸の磨りガラスから、白い明かりが漏れていた。まだ、誰かいる。指先の冷えを、湊はコートのポケットの中で握りしめた。仕事に潰されそうな毎日のなかで、ふと、あの墨の匂いのなかの、静かな時間を、もう一度取り戻したくなった。字が汚い自分が書道教室の戸を叩くなんて、順序が逆さまなのかもしれない。けれど、逆さまだからこそ、行ってみたい気もした。

意を決して、湊は格子戸に手をかけた。

思ったよりなめらかに、戸は横に滑った。

三和土に一步入ると、外の冷たさが嘘のように、ふわりと、墨の匂いに包まれた。木と、紙と、墨。古い家が長い年月をかけて吸い込んできたような、落ち着いた匂いが、廊下の奥から流れてくる。その匂いの向こうで、さらさら、と、かすかな音がした。筆の先が、紙の上を滑っていく音だ。誰かが、まだ、書いている。音が、止まった。

「――どなたですか」

奥から、女性の声がした。低すぎず、澄んだ、まつすぐな声だった。廊下の先の障子が開いて、その人が姿を現す。黒髪を後ろでひとつにまとめ、簪でとめている。落ち着いた藍鼠色の着物に、袖をたくし上げるための襷を掛けていた。まとめきれなかった髪がひと筋、耳の前に落ちていている。年上だ、と一目でわかる、静かな落ち着きがあつた。

「あの……看板を、見て。書道を、習えないかと」

湊がしどろもどろに言うのと、その人は少し驚いたように目を見開いて、それから、やわらかく笑った。

「こんな時間に。……びつくりしました。飛び込みの方は、久しぶりです」

そう言つて、彼女は襷を、そつと外した。落ちた袖口から、また、墨の匂いがふわりと立った。

「硯澄香です。この教室を、一人でやっています。……大人の方の、初めての方、ですか」

「はい。字が、その……汚くて。恥ずかしいんですけど、直せるものなら、直したくて」

言つてしまつてから、湊は耳が熱くなつた。習いに来て開口一番、自分の欠点を差し出す人間もないだろう。けれど澄香は、笑わなかつた。むしろ、少しだけ嬉しそうに、目を細めた。

「直したい、と思つて戸を叩けるなら、じゅうぶんですよ。字は、性格じゃなくて、慣れですから。……上がつてください。冷えたでしょう」

澄香は、湊を稽古の間へ通した。八畳ほどの和室に、木の文机が二列。壁際には筆や硯や、丸めた半紙の束が、整然と並んでいる。部屋の隅では、古い火鉢が、ぽつと赤く灯っていた。その炭の熱が、冷えた頬に、じんわり沁みる。障子の外では、木枯らしが、電線を鳴らしていた。

「まず、座ってみましょうか」

澄香は、文机の前の座布団を指した。促されるまま正座をすると、澄香も、当たり前のように、その隣に膝を折った。

近い、と思つた。

膝が触れそうな距離だった。彼女の側から、墨の匂いと、その奥に、洗いたての木綿のような、清潔な香りがふわりと漂う。文机の上には、もう、硯と、水を含ませた筆と、一枚の半紙が、用意されていた。

「筆を、持ってみてください」

言われるまま、右手で筆の軸をつまむ。慣れない太さと、思つたより軽い重みが、指先に頼りなかった。

「……力が、入っていますね」

澄香が、そつと、湊の右手に、自分の手を重ねた。

息が、止まった。

彼女の手のひらは、あたたかかった。細くて、しなやかで、けれど筆を握り慣れた、芯のある指だった。その手が、湊の指の上から、筆の角度を、ひとつずつ直していく。もう少し、立てて。人差し指は、添えるだけ。手首は、こう。触れる指先の温度が、湊の手の甲に、じんと沁みこんでくる。

「肩の力を、抜いて。……筆に、任せてしまふんです。あなたが書くんじゃないくて、筆が紙の上を歩くのを、手伝うだけ」

低い声が、耳のすぐそばで言った。その息が、湊の耳のあたりに、かすかにかかる。澄香は、たぶん、そんなことは意識していないのだろう。筆の角度を直すことだけに、集中している。まつすぐな横顔が、すぐそこにあつた。まつげが長い、と、湊は、場違いにも思った。伏せられたまぶたの下で、その瞳が、湊の筆先を、じつと見つめている。

「では、いちばん簡単な、横棒を、一本。とめて、送って、また、とめる」

重ねられた手に導かれるまま、筆先が、半紙の上に、そつと下りた。ひやりとした感触のあとに、墨が紙に吸い込まれていく、ほんのわずかな抵抗。さらさら、と、あの音がした。さつき廊下で聞いた、筆が紙を滑る音。それを今、自分の手が、彼女の手と一緒に、立てている。ただ一本の、横の線。それだけの線なのに、湊の胸の奥で、何かが、静かにふるえた。

「……引けました、ね」

澄香が、うれしそうに言った。まるで、自分のことのように。重ねられた手が、名残を惜しむように、ゆっくり離れていく。離れた手のひらの温度が、湊の手の甲に、まだ残っていた。その、ほんのわずかな温もりの

喪失が、なぜか、湊には、少しさびしかった。

半紙の上には、たった一本の、横棒があつた。お世辞にも上手いとは言えない、少しふるえた線。それでも、始まりと、終わりに、きちんと墨だまりがあつて、まっすぐ、伸びていた。

「不思議ですね」

澄香が、その線を見つめたまま、言つた。

「たった一本の線でも、その人の、いろんなものが出るんです。せつかな人、迷っている人、優しい人。……湊さんの線は、まっすぐでした。まじめな方なんですね、きつと」

たった一本の線で、そんなことまでわかるのだろうか。半信半疑だったけれど、まっすぐ、と言われたことが、なぜか、うれしかった。会社では、要領が悪い、不器用だと、そればかり言われている。そのまじめさが、ここでは、まっすぐ、と呼ばれる。それだけのことで、湊の胸の、ずっと縮こまっていた部分が、ほんの少し、ゆるんだ。

「今日はどう遅いので、少しだけ。筆の持ち方と、横棒と縦棒だけ、覚えて帰りましょうか」

三十分ほど、澄香は根気よく教えてくれた。湊のぎこちない線が、途中で震えたり、墨をつけすぎて滲んだりするたびに、彼女は急かすでもなく、もう一度、と静かに言つた。ときどき、また手が重なる。そのたびに湊の心臓は跳ねたが、澄香のほうは、それがごく自然な指導の一部だという顔をしていた。火鉢の赤い炭と、木枯らしの音と、たどたどしい筆の音。それだけが、部屋を満たしていた。

「——今日は、このくらいにしましょう」

気づけば、九時近くになっていた。

「すみません、こんな時間まで。俺、仕事が終わるのが、いつもこのくらいで」

湊が恐縮すると、澄香は正座をほどいて、少し伸びをするように、肩を回した。

「いいんですよ。……うち、最後の時間は、いつも私一人だけなので。ゆつくり見られます」

そう言った横顔が、火鉢の赤い光の中で、ほんの少しだけ、さびしそうに見えた。ひとりで教室を守り、一日の終わりの時間を、いつも一人で過ごしている——その静けさを、彼女がどう抱えているのか、湊には、まだ聞けなかった。聞くには、今日、会ったばかりだった。

次回の予約を、来週の同じ時間に取った。澄香が古い紙の台帳に、筆ペンで名前を書きつける。遠野湊さま、と、流れるような文字が、すつと紙の上に生まれた。その手つきの、まっすぐな美しさを、湊は横で見ている。自分の汚い字とは、まるで別の生き物のようだった。

帰り支度をしながら、湊は、ふと、壁際に立てかけられた、一枚の額に目をやった。古い和紙に、一文字だけ、大きく書かれている。読めない崩し字だったが、その一画一画に、なにか、張りつめた強さと、静けさが同居していた。

「あれは、先生が？」

「……昔のです。もう、ずいぶん前の。今は、あんなふうには、書けません」

澄香は、その額を、少しだけまぶしそうに見た。そこにどんな時間が詰まっているのか、湊には、まだわからなかった。ただ、「今は書けない」と言った声の、静かな囁きだけが、耳に残った。

「では、また来週。……お仕事、無理しすぎないでくださいね」

見送りに玄關まで出た澄香が、格子戸のところで、そう言った。生徒への決まり文句だとわかっていても、その「無理しすぎないで」が、疲れきった湊の胸に、じんと沁みた。

格子戸が閉まると、外の木枯らしの音が、また、戻ってきた。ふと振り返ると、磨りガラスの向こうで、澄香の白い明かりが、まだ灯っていた。あの人は、これから、誰もいなくなつた教室で、一人、墨を磨るのだろうか。その筆の音を、聴く人が、誰もいない夜を。湊は、なぜか、その明かりから、すぐには目を離せなかった。

夜の住宅街を、駅へと歩く。木枯らしが頬を刺したが、稽古の間の暖かさが、まだ体の芯に残っていた。湊は右手を、コートのポケットから出して、街灯にかざしてみた。澄香の手が重ねられていた、この手。もう何も残っているはずがないのに、そこにまだ、あのあたたかい指の温度が、残っている気がした。

——ただの、稽古だ。

自分にそう言い聞かせる。相手は先生で、自分は生徒で、あの手の重ね方は、きつと誰の手に対してもおなじなのだ。わかつている。わかつているのに、電車のつり革につかまった頃になつても、湊の頭の中では、今日引いた一本の線が、ずっと消えなかった。

そして、袖口から、ふとした拍子に、墨の匂いが立った。彼女に触れたとき、コートの袖に、うつたのかもしれない。その匂いは、家に着いても、風呂から上がつても、布団に入つても、うすれるだけで、消え

なかった。灰色に塗りつぶされたこの秋のなかで、来週の火曜の夜。その一日だけが、そこだけ、ぽつんと、墨の色で染まっているように、思えた。